

女の旅、庶民の旅

著者	浅見 和彦
雑誌名	日文研叢書
巻	43
ページ	153-172
発行年	2009-03-19
シリーズ	共同研究報告書 No. 89
URL	http://doi.org/10.15055/00005162

女の旅、庶民の旅

一

ヨーロッパでは娘や処女を閉じ込めておくことはきわめて大事なことで、厳格におこなわれる。日本では娘たちは両親にことわりもしないで、一日でも幾日でも、ひとりで好きな所へ出かける。

ヨーロッパでは妻は夫の許可が無くては、家から外へ出ない。日本の女性は夫に知らせず、好きな所に行く自由をもっている。

（ルイス・フロイス『日欧文化比較』岩波書店）

浅見和彦

ルイス・フロイスの日本「発見」は多岐にわたる。フロイスの眼に映った日本の女性には、ヨーロッパの女性にはない、ある自由が与えられていると見えたのである。なかでも旅行の自由、外出の自由はやはり瞠目に値することであつたようだ。もちろんこれをもつて十六世紀の日本では、すべての女性に旅の自由が与えられていたのだなどと速断することは、なお慎まなければならないだろうが、歴史的に見ても諸外国と較べて、日本女性が旅に出る機会是比较的多かつたといえる。文学の世界に於いても、平安時代の『更級日記』、鎌倉時代の『十六夜日記』『とはずがたり』などは女性の旅日記としてよく知られているし^{（註）}、

男もすなる日記といふものを、女もしてみむとするなり。

（土佐日記）

と、女の旅行記の体裁をとる『土佐日記』は紀貫之の手になるものだが、なぜ女に仮託したか、あるいはなぜ女に仮託できたか、と考えると、女が旅をして不思議ではない日常が当時すでにあったから、と答えることができるかも知れない。平安時代から女たちは旅する自由を持っていた可能性がある。

殷富門院大輔いんふもんいんたゆうは平安時代末期から鎌倉時代初めの女流歌人である。後白河上皇の皇女の殷富門院亮子に仕えていた宮廷女房である。彼女は寂蓮ら歌友、友人をさそって、南都、奈良を巡遊することがあった。東大寺、興福寺、元興寺、薬師寺、大安寺、西大寺と南都の諸大寺を巡り回っている。東大寺ではもちろん「大和、唐もろこしにもたぐひおはしまさぬ仏」である大仏を拝み、大仏建造の折に陸奥より産金の報に応えた詔書や大伴家持の歌などを観覧する。興福寺でも南円堂、一言寺を巡拝、光明皇后の書きつけた歌を目にし、元興寺でも智光曼陀羅など数々の宝物を拝観しているのである。寺々を巡拝し、本尊を拝み、由来の宝物を観覧する。現代の杜寺めぐりとさほど変わらない旅を彼女はしていたと見られる。

殷富門院大輔の一行はさらに足を延ばすこともあったらしい。長谷寺に詣で、高野山に参詣する。また難波へと向かい、天王寺、住吉大社へと巡る。途中、住吉の浜では、

浜の飯屋どもめづらしくて、壺ども多く取り並べたる

光景に目を惹きつけられる。漁師たちの浦の苫屋、浜辺に取り置かれていた漁具の類い、どれをとつても王朝人たちには新鮮なものであったに違いない。瀬戸内海に開かれた広大な海辺、打ち寄せる波の音、潮の香をいっぱい含んだ浜風、庶民の生の生活風景。宮廷歌人の彼女らに深い印象を与えたことであろう。新しい風景の発見がここにはあるといつてよい。

彼女らが巡遊したのは寺社のみではない。

奈良の仏、拝みに参りたるついでに、在中将の堂、沖つ白波、心にかけてる住みかなど見て、具したる人の許に遣はしし

(同前)

しほれたる花の匂ひをとどめけん名残身にしむ住まひをぞ思ふ
奈良巡拝の折、彼女は「在中将」、すなわち在原業平の古蹟を訪ねたのだった。「沖つ白浪、心にかけてる」とは『伊勢物語』二三段などで有名な、

風吹けば沖つ白波たつた山夜半にや君が一人越ゆらむ

の歌にもとづくものである。他行を続ける業平の身の上を案じて、本妻が作ったといわれる歌である。その遺蹟を殷富門院大輔たちは訪れ、しばし物語の世界に心を遊ばす。業平ゆかりの場所を訪ねることは、王朝物語の名作の舞台を遊覧し、物語を追懐しようということに他ならない。彼女たちにとって、美男業平の行跡は常に心にかかることであつたし、見落とすことのできない名所であつたのだ。柿本人麻呂の墓（奈良県天理市榛本町の歌塚か）に詣でた時も「在中将、花のころの住みか（在原神社か）など古き跡ども訪ね」歩いており、業平の旧蹟めぐりにかける情熱にはあつたものがあつたといつてよいだろう。

気おけない仲間たちとの旅は楽しかった。旅先で偶然出会つた彼女の歌仲間をもまじえ、共に和歌を詠じ合い、共に連歌に興じ合う。管弦に心を遊ばせ、逸楽のひとつときを楽しみ過ごす。彼女の家集『殷富門院大輔集』にはそんな楽しげな遊興の旅が綴られている。

一一

平安時代の女性たちは想像以上に旅をしていた。この殷富門院大輔たちの南都めぐりと相前後して行われたかと思う、さる高貴な女性（二代後の多子か）の南都巡礼の旅（建久二年（一一九一）もある（建久御巡礼記）。また院政期から中世にかけて、女性たちの

熊野詣もさかに行われた。次に見るのは足利將軍家の女性たちによつて行われた室町時代の熊野詣の記録である。

応永三四年（一四二七）九月、足利義満の側室の北野殿、義満の女の南御所と今御所と呼ばれる二人の姉妹、都合女三人は熊野詣に出発した。三人といつても先達、山伏、騎馬の衆、比丘尼、上臈たちを引き連れた一団で、随行の先達、実意の記した『熊野詣日記』によれば、「御興二十余丁」引き続き、そのさまは「おもしろく、貴し。見る人、手を合せて拝み奉る」といった壮麗な行列を組んでのものであつたらしい。北野殿の熊野詣は応永三年（一三九六）以来、この度まで十三度、ほぼ二年に一回の割合で参詣していることになる。

一行は鳥羽より淀川を船で下り、摂津渡辺の津をめざす。

河の面、浪静かに、風追手なり。御舟の道すがら見所多し。
八幡山鮮々として、いと尊く見えたり。

淀川の舟旅はなかなか快適だったらしい。波も静か、風は追風。兩岸の景色に思わず見惚れてしまう。なかでも石清水八幡宮の鎮座する八幡山は姿をくつきりと見せ、神々しいばかりであつた。船はなお進む。岸辺のそこそこには、

あるひは賤が伏屋あり。あるひは優しく住みなせる所もあり。社々寺々もあり。御舟の下るにしたがひて、変はり行く景色、いとおもしろし。御舟、道の中半ほどにて、破子のせたる舟を招き寄せて、御酒杯を参らす。御賞翫なのめならず。

ある所には賤の屋もあり、またある所には雅びやかな家々もある。由緒ありげな神社、寺々を見ながら下る船旅の風景の感興は格別であつた。途中で昼の食べ物を載せている舟を呼び寄せ、酒杯を挙げ。北野殿をはじめ上臈たちの喜びは一通りでなかったという。

一行は夕闇迫るころ、渡辺の津に到着する。しかしあたりはすでに暮れかかり、生駒山を見ることはできず、無念のおもいしきりであつたらしい。

旅の風景にこだわることは今も昔も変わらない。淀川を緩やかに下る川船の景観は京都に住まう上流武門の女たちにとっては極めて新鮮であつた。旅の景色を楽しむ。それこそ古今東西変わらぬ旅の醍醐味であつたのだ。

藤白峠（和歌山県海南市）から見える和歌の浦の大観はまさに絶景であつた。

この所の眺望いまさらならねども、まことに金岡が筆も及ばざりけん、ことわりなり。和歌、吹上、玉津嶋、御目の前に見え

たり。清水の浦はこの山続きの麓なり。こまやかなる風情、絵にもかきとどめがたし。御目離れせぬ浦々嶋々の景色なり。あまりに時経れば、御立ちあり。

藤白峠は熊野参詣路にあつて、藤白王子のある場所でもある。古来、後鳥羽院を始め、幾多の貴頭が足を止めた。和歌の浦、吹上の浜、玉津嶋明神が眼下に広がる景勝の地であつたのだ。その景勝は巨勢金岡（平安時代前期の名画家）だつて描けない。人々はその見事さに目を奪われ、立ち去ろうにもなかなか立ち去れなかつたという。

美しい好景に出会い、それを賞美する。それは誰しもが旅で経験することだ。現代であればすぐ写真におさめ、ビデオに撮る。絶景に強く心動かされ、記念にながくとどめておきたいからである。その心情には古今変るところはない。今も昔も旅の歓楽は基本的に同じといつてよいだろう。

知つての通り、熊野街道は摂津渡辺から熊野本宮、那智に至る道で、途中には熊野権現の分身とされる王子社が設けられ、俗に「十九王子」と呼ばれている。参詣者たちはその王子社に立ち寄り、参拝、神楽、時には和歌など奉納した。王子、王子には独特の風習もあつたらしく、『熊野詣日記』にもそのいくつかが記されている。

藤白峠を越えた一行は有田川を渡り、糸我峠にさしかかる。そ

こで輿をとどめ、小休息をとる。

糸我峠にて御輿たつ。地下の童部集り参りて、「たてらん、たてらん」と申て、さかさまふりをたて侍る。此儀、逆さかさまは川の王子の御前にてあるべきなり。

そこには近隣の「童部」が集つてきて「さかさまふり」をたてたという。「さかさまふり」というのが、どのような儀礼であるのかはよく分らないが、どうやらこれから向かう逆川王子での儀礼であつたらしい。

次の日は内ノ畑王子で昼食。内ノ畑王子は槌つちの王子ともいう。ここでも一行は珍しい習俗を目にする。

槌の王子、この王子にては、槌を作りて木の枝につけて、「徳あり、徳あり」とはやしてまいらするなり。

木の枝に槌をぶら下げてはやし立てる。槌の王子の御前で奉納される民間儀礼なのであろう。これについては建仁元年（一一二〇）、後鳥羽院や藤原定家らが同道した熊野詣の折にも同一のことがあつたらしい。

暫く山中にて休息して、小食。此処に於て、上下、木の枝を伐ち、随分槌を造る。榊の枝に付け持ちて参ず。内ノ畑の王子（槌金剛童子と云々）。各々これを結びつくつと云々。（明月記）

後鳥羽院らの熊野詣よりおよそ二百年余り、内ノ畑王子では同じ奉納儀礼が守られていたのである。

北野殿一行は田辺より山道に入る。いわゆる中辺路をたどり熊野本宮、さらに新宮、那智の熊野三山を巡拝、帰途につく。

帰り道、切目王子のことである。

切目の王子の御前にて、御化粧の具参る。（豆の粉なり）。御額、御鼻の先、左右の頬先、御頤等に塗りまして、まさに王子の御前を通らせ給ふ時は、「稻荷の氏子、こう、こう」と仰らるべき由、申入る。

珍奇な習俗があるものだ。切目王子は九十九王子の中でも、藤白、稲葉根、滝尻、近露とともに五体王子に数えられる重要な王子であつた。ここを通過する時は額といい、鼻先といい、ほつぺた、アゴにいたるまで豆の粉で白く塗り、御前を通る時には「稻荷の氏子、こう、こう」といわなければいけない。豆の粉で顔を白く塗るというのは狐への変身を意味する。誰しも「稻荷の氏子、コン、コン」

と呪文のような言葉を唱えなくてはならない。北野殿、南御所、今御所をはじめ、上臈、中臈、下臈を問わず、全員で白く塗った顔で、「コン、コン」と狐の鳴きまねをしながら通つていったのである。大真面目にやったのか、それともみな笑いころげながらやったのであろうか。

思い合わせられるのは『蜻蛉日記』である。初瀬詣でに出かけた帰り道、「音せでわたる森」、すなわち「音を立てないで通り過ぎる森」にさしかかる。

音せでわたる森の前を、さすがに、「あなかま、あなかま」と、ただ手をかき、面を振り、そこらの人のあぎとふやうにすれば、さすがにいとせむかたなく、をかしく見ゆ。

「音せでわたる森」、これで固有名詞なのだと思われるが、残念ながら場所が特定できていない。道綱母らは一言も発せず、その森を抜ける。「あなかま、あなかま」、「ダメよ、ダメよ」とお互いに言葉には出せないものだから、手で合図、首を振つて、たがいに誠め合う。口を魚のようにパクパクさせるばかり。その姿はもうおかしくておかしくてたまらない。王朝の貴婦人たちにもおかしいことはおかしいのである。

音を一切立ててはいけない。静謐を保ったまま通り過ぎなくては

ならない。その土地に伝わる民間信仰だったのである。彼女らはそれを堅く守り、やり遂げようとする。その姿がまたおかしい。庶民階級の土俗的な習俗であつても何の抵抗もなく、進んで習おうとする点では道綱母も北野殿たちも同じである。道綱母たちは口をパクパクさせるだけで音を立てまいとし、北野殿たちは顔を白く化粧して狐の鳴きまねをしながら通過しようとする。どちらも笑いころげる寸前であつたのであろう。女旅ならではの場面である。

北野殿一行にはもう一つ愉しみがあつた。

御さか月まいる・・・

いつもの如く御杯まいる・・・

御さか月をまいらす。御賞翫なのめならず・・・

御さか月たびたびまいりて後・・・

そのち御三さか月まいりて・・・

御さか月下されて・・・

「さか月」とはもちろん「酒杯」をさす。集中に頻出する酒飲の記事は挙げきれないほどだ。こんな場面もある。出発を翌日にひかえ、祇園社の御精進屋に籠もった夜のことである。

今日は例日にて、御心静かなり。興遊を先としましませば、い

かに御酒宴のみにて侍らん。ただ権現を尊とび給へる御心にて、御勤めがちなり。北野殿さまも御くたびれにて、御さか月なども、たびたびにも及ばず。

（今日は精進の例日であつたから、心静かに過ごした。興遊を第一とすれば、きつと御酒宴ばかりとなつてしまつたことだろう。権現を尊崇される御気持は強く、勤行に励まれる。北野殿さまも御疲れのよう、酒杯もたびたびということはなかつた。）

今日は精進日、酒も控え気味であつた。もし遊興を先とすれば、賑しい酒宴となつてしまつたに違ひないというのである。北野殿の嗜好にもよろうが、一行は結構、いやかなり呑んでいる。大飲といつてよいかも知れない。名勝に感嘆し、酒興に酔う。今に共通する旅の逸樂ではなからうか。

いよいよ熊野詣も終わりに近付く。往きにも立ち寄つた天王寺で昼食。

供御ののち、北野殿、亀井の水、召し寄せられてきこしめさる。水なを筒に入れて、京にもたせらる。

北野殿は天王寺の亀井の水を汲んで水筒に入れ、京に帰る。土産物というにはやや早過ぎるかも知れないが、旅の賜物として持ち帰

ろうとしたわけである。旅の終わりの記念なのである。

巻末の識語に、

応永卅四年十月十五日、南御所依御所望書進之
御先達法印権大僧都実意記之

とある通り、『熊野詣日記』は「南御所（足利義満女）」の求めに
応じて、随行先達の実意が筆録したものである。男の手になるもの
とはいへ、往還の佳景に喜ぶ姿、王子、王子で奉納された神楽や土
俗的な儀礼、「昼養」「小養」の酒食の記事など、女性的な視点や
感性がうかがえるのも特徴である。「南御所」の「所望」に出来る
る限り添おうとした筆録者の姿勢を認めてもいいのかも知れない。
室町時代の女旅の記録として貴重な資料である。

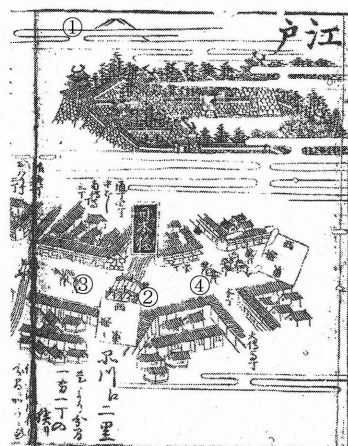
三

さて今度は視点を変えて、江戸時代の庶民の旅の模様をながめて
見よう。江戸時代を通じて道中記、名所記の類や絵図の類が多数出
版されたことはよく知られている。十返舎一九の『東海道中膝栗毛』
が好評を博し、幾度も版を重ね、影響作が次々と作られたのも、江
戸時代を通して、旅行熱が高まり続けていたことの反映である。わ

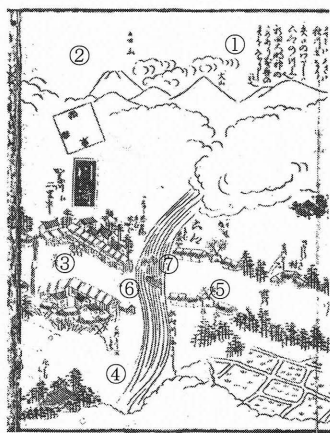
けても東海道にまつわる出版は多かった。ここに取り上げる『東海道分間絵図』もその一つである。

『東海道分間絵図』は元禄三年（一六九〇）に初版が発行された。

東海道の全行程を一丁（約一〇九メートル）を三分（約九ミリメートル）に縮約したもので、現代の単位でいえば約一万二〇〇〇分の一の図といえることができる。そのため大判となり、いささか携行には不便であった。宝暦二年（一七五二）、これを三分の一に縮約、すなわち一丁（約一〇九メートル）を一分（約三ミリメートル）に縮尺したものが作られた。現代の縮尺でいえば三万六〇〇〇分の一である。版型は小型化され、縦一五・五センチメートル、横九センチメートルという、携帯至便なものであった。およそ現代の旅行案内書の大きさと考えてもらえればよい。三万六〇〇〇分の一という縮尺からわかる通り『東海道分間絵図』はそれまでの絵図、地図類と違って、正確さが売り物であった。まず方位尺。図Aの日本橋（図Aの②）の右側に示されている方位尺と図Dの岡崎宿で示されている方位尺とは明らかに方向が違う。これはもちろん誤記でも何でもなく、東海道の道筋を横長の紙面に書き入れる都合上、道の向きを修正し、そのかわりに方位尺で正確な道筋を示そうとした方策に他ならない。ついでにいえば岡崎宿の道の真中に引かれている二本線（図Dの④）は何かといえば、俗にいう岡崎の二十七曲りを示したものである。岡崎城主だった田中吉政は防衛上の必要などから、宿



図A 日本橋

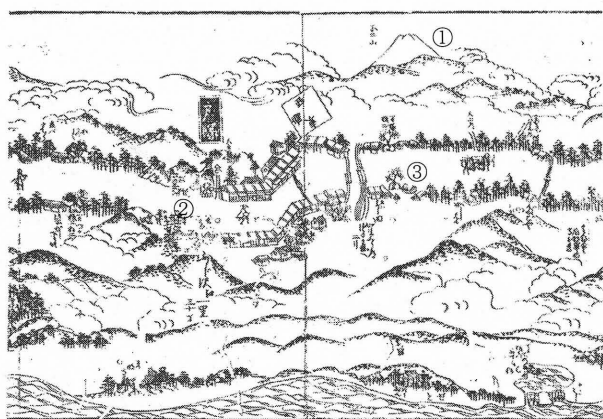


図B 川崎宿

内を通る東海道に屈曲を加えた。田中吉政のあとを承けた本多康重は東海道を岡崎城の城内に引き入れ、商業の振興をはかったといわれる。このため岡崎城下では東海道は折れ曲がり、旅人を戸惑わせることも少なくなかった。そこで旅人の不便を除くべく工夫が凝らされたのが『東海道分間絵図』であったのだ。『絵図』に示された

二本線の二十七曲りは現在の岡崎市内の二十七曲りのかたちとほぼピッタリと重なり合う。『東海道分間絵図』の正確さには今さらながら驚かされる。

江戸城の遠景に富士山が見える（図Aの①）。事実、江戸時代、日本橋の橋上からお城の向こうに富士山の雄姿が見えていたという。図Bの川崎宿まで至ると富士山の右に大山が並んで描かれる（図Bの①）。実際、現在の東海道新幹線の車窓から同じ風景を見ることができる。見落としてならないのは、図Aの日本橋から見える富



図C 戸塚宿

士山と図Bの川崎宿の富士山（図Bの②）の形状が微妙に違うことだ。図Cの戸塚宿の富士山（図Cの①）を見れば、なお一層その違いは鮮明になる。『絵図』の絵師はそれぞれの地点から見える富士山の実景をできる限り忠実に写し取ろうとしていたのだった。水上を航行する者は山を目標にして船を進めた。いわゆる山あてである。ことは水上に限らなかつたのであろう。陸を歩く旅人にとっても山は貴重な道しるべであつた。だからこそ山の並び、山の姿、大きさを正確に描こうとしたのである。

次に街道筋を見ていこう。まず日本橋（図Aの②）、その左の橋詰に立つのが高札場（図Aの③）、現在の日本橋にも同じ場所にそれを記念する造作物が立つ。この高札場の標は街道筋の随所に見られる。たとえば川崎宿（図Bの③）、戸塚宿（図Cの②）、岡崎宿（図Dの①）にも高札場は描き込まれている。いずれも高札場跡として現在も確認されている場所に間違いなく記入されている。旅人たちにとって高札場は重要な掟が記されているものであると同時に、旅を進める際の重要な目印でもあつたから、正確さがもとめられていたのだ。

もう一つ旅の目印として大きな役割を果たしていたのが一里塚である。当然のことながら『東海道分間絵図』にも多数描き込まれている。川崎宿の真中を流れるのが六郷川（図Bの④）、すなわち多摩川である。古く江戸の境、当時は橋は架せられず、鎌倉にある縁



図D 岡崎宿

切寺、東慶寺に逃げ込もうとした江戸市中の女たちは、この多摩川を無事に渡れるかどうか、事の成否の大きな鍵であった。「六郷渡し」の舟(図Bの⑥)が絵図にも描き込まれている。

その多摩川の東岸の道の両側に一里塚(図Bの⑤)が見える。書き込まれている注記によれば「榎」の木が植えられていたらしい。川の両岸には立場の茶屋(図Bの⑦)があったことがわかるし、名物の「奈良茶」(茶飯に豆をまぜたもの)の記入もある。因みにこの辺りでは奈良茶店として有名だったのが万年屋、『東海道中膝栗毛』にもその名が出てくる。

一里塚はそこそ随所に見られる。戸塚宿の場合「一里塚 榎二」(図Cの②)、岡崎宿では矢作川にかかる東海道随一の長さ(二百八間)を誇る矢作橋の西詰に「榎二」「一りづか 榎一」(図Bの③)と記されており、それぞれの一里塚に植えられている



図E 『東海道分間絵図』の表紙裏
下部の円が潮の干満早見表

樹木の種類、その本数に至るまで綿密に記入されているのである。

街道の模様の精細な描写はこれにとどまらない。日本橋界限の小屋の屋根はすべてが瓦屋根に描かれている(図Aの④)。これに対して、岡崎宿などを見ると、宿入口あたりでは葦屋根(図Dの③)、宿の中央付近では板屋根(図Dの④)に描き分けられており、町並の景観も出来る限り分かるようにするといった、念の入れようなのである。

『東海道分間絵図』の「分間」^{ぶんけん}とは地形や距離を実際に測量し、測ることを意味する。「分見」と表記する時もあり、実地に見分し、測定することをいう。類義語に「細見」という言葉もあり、こちらは詳細に観察、測定する意である。江戸時代の道中記に『大日本早引細見絵図』とか『道中細見定宿帳』などと書名によく使われた。「分間」にしろ「細見」にしろ実地の詳細、正確な検分が基本であ

る。『東海道分間絵図』の場合、一万二〇〇〇分の一、あるいは三万六〇〇〇分の一という縮尺率のもとに、東海道を縮約し、街道の屈曲に従い、方位尺を記入する。高札場、一里塚屋並に至るまで実地の形態にできる限り近付けようとした点、まさに「分間」「細見」というにふさわしい「絵図」であつたといつてよいだろう。



図 G 『大日本道中行程指南車』付載の日時計

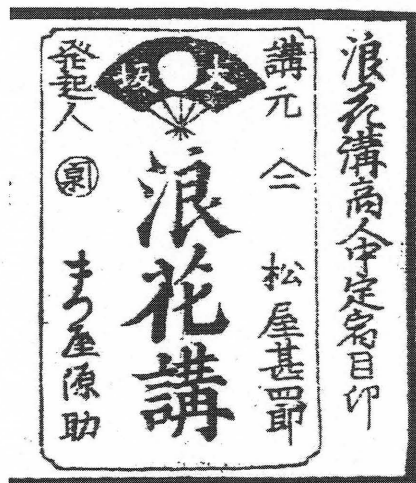
江戸	大塚	板橋	練馬	池袋	荒川	見附	松本	荒井	荒井
一里	二里	三里	四里	五里	六里	七里	八里	九里	十里
...

図 F 『東海道分間絵図』の駄賃表

『東海道分間絵図』について最後にふれておきたいのは、その付録の部分である。図 E は表紙裏で内題の記された部分であるが、下方に見える円は潮の干満の早見表である。外側の円には日付、内側の円には時刻が記されており、この二つの円は紙捻でとめてあつて、内側の円は自由に回転させることができるようになっていた。東海道の語源は「東の海の道」、すなわち海岸の道であるゆえ、潮の満干は旅にとつて重要な問題であつた。日付と時刻を合わせれば、干満の頃合いを簡便に知ることができるという工夫なのだ。

こうした簡単な仕掛けは他書にも見られる。文政三年（一八二〇）版の『大日本道中行程指南車』には日時計が付いている。（図 G）。上方の四角の欄は月数、その下の「九」「四」「八」といった数字が時刻を表わす。上欄の月数は黄色い紙の薄片を貼り付けたもので、その月の薄片を立てて、太陽に向ける。影の長さで時刻を知るのである。旅行者の便を考えて、それぞれ細かな工夫を凝らしているのである。

図 F は『東海道分間絵図』の巻尾に付載された東海道の各宿場間の距離と駄賃表である。たとえば冒頭の「日本橋」を見ると下に「二里」とあり次の品川宿までの距離を示す。その下の「九十四文」「六十一文」「四十七文」はそれぞれ「本馬」（四十貫までの荷をつけた馬）、「軽尻」（人を乗せて、荷をつけない馬）、「人足」（五貫目までの荷物を運ぶ）の料金表である。現代の交通費、運送料にあた



図H 浪花講の看板

ろうが、この種の駄賃表を付載する道中記は多く、時にはこれにお勧めの宿屋、休息所、名物まで載せているものも多い。とくに文化年間（一八〇四—一八）に結成された浪花講という組織はある種の旅行組合といってよいもので、飯盛女などを置かない、安心で良好な旅館を広く提供しようとした試みであつた。これに認定され、参加した旅館は図Hのような看板を玄関に掲げるきまりにしていた。旅人たちはこの看板を目印にして宿泊すれば、危険な目に会うことはないというわけである。現代の「日観連」（日本観光旅館連盟）などと近い旅行組合がすでに江戸時代後期には成立していたのである。江戸時代の旅人たちはこうした道中記、案内書を懷中に携帯しながら、絵図に従い、宿を捜し求め、名物、土産を買い求めていったのである。江戸時代の旅の姿がありありと浮んでくる。

四

江戸時代、旅は一気に庶民化し、大衆化した。参勤交代などの公的な団体の旅もあったが、幕命や藩命による公務の旅、通商、運輸の旅、そして伊勢参りのような個人、民間の旅もきわめて多かつた。それゆえに道中記や絵図類の出版は陸続と続き、旅の情報は多量であつた。文化七年（一八一〇）に刊行された八隅蘆庵の『旅行用心集』もその一つである。この本の特徴は旅への「用心」、心得に重点をおいているところにある。冒頭に東海道五十三駅、中山道七十二程の旅程絵図を揚げ、ついで「道中用心六十一ヶ条」として、旅の心得六十一ヶ条をまとめて述べる。出発までの準備、移動中の注意、宿泊時の注意、常備薬の用意、病虫害への対策など、その内容は旅行全般に及んでおり、なかには現代の我々旅行者にも有益なことがある。そのうちのいくつかを取り上げてみよう。

はたしや
駅舎へ到着して、第一にその地の東西南北の方角を聞き定め、
次に家作、雪隠、裏表の口々等を見覚え置く事、古き教へなり。
近火、或は盗賊、又は相宿に喧嘩等ある時のためなり。

旅宿に着いたら、まず第一にすべきこと。それは東西南北の方角

を教えてもらい、宿の平面図、トイレ、非常口をよく頭に入れ、この目で確認しておかなければならない。火事や盗賊、喧嘩、騒動がもしおこった時のためである。宿泊時の常識のようなもの。

泊^{とまり}々にて、刀、脇差は自分寝る床の下へ入れ置くべし。鎗^{やり}、

長刀等も床の奥へ置くべし。

宿泊する時は刀や脇差は必ず自分の寝具の下に置き。槍や長刀など大きい武器も、部屋の入口近くではなく、部屋の奥に置きといふのである。もちろんこれらは、もしも盗賊や敵が侵入してきた時、すぐ武器を手にとることができるようにするためである。槍、長刀等の大型の武器を奥に置く。侵入者に先に奪い取られないようにするためだ。同様の記述は浅井了意の『東海道名所記』にも述べられており、

宿につきては、家の勝手、閑道^{うらみち}の要害、見置くべし。

座敷の壁に荷物をよせかけて置くべからず。畳の落ち込みて、柔らかなる所あらば、畳を上げて、これを見よ。

宿に着いたら、宿の勝手口、裏道、裏口をまず確認しろ。もちろん避難のためである。ひょっとして侵入者への警戒もあるかも知れ

ない。荷物を壁際に置くなというのは盗難防止のため。部屋の畳を踏み回り、畳の落ち込むところがあつたら、畳を上げて、下を覗いて見る、床に穴が開いているかも知れないからだ。床下の穴は盗賊の格好の侵入路である。近世の大名たちの旅行では本陣に泊まる場合でも畳を全部上げて、持ち来たった鉄板を下にまず敷いたといわれている。防衛、防禦、身の安全への備えは近現代の旅と大きく違う。さらに『名所記』では、

蚊帳^{かや}の内ならば、片脇に立ち寄り、壁に沿ふて臥すべし。夜

盗入りて、釣り手を斬り、押しつつむ時の用心なり。

宵に寝たる所をば、脇へ替へて寝直れ。太刀、刀は柄口を我が身に添へて置くべし。

遊女にたはれて金銀盗まるるな。たとひ呼ぶとも、心許すな。

蚊帳^{かや}の中に寝る時は真中に寝てはいけない。もし夜盗が侵入してくれば、まず蚊帳の釣り手を斬つて落とす。労せずして中に閉じ籠めることができるからである。だから真中に寝てはいけない。端っこであれば咄嗟に脱出することができるからだ。眠ってから同じ位置で寝続けていてはいけない。必ず場所を移動しろ。もしも宵より目をつけられねらわれていた場合、ひそかに寝場所を替えていれば、難を逃れることもできるからだ。

『東海道名所記』の成立は万治元年（一六五八）。旅の危険への対処、心構えの大綱はすでに江戸時代初期には出来上がっていた。

再び『旅行用心集』に戻ろう。現代の宿泊施設ではほとんど見られなくなったが、かつて日本の宿でも相宿は珍しくなかった。見知らぬ者同士が同じ部屋に宿泊すれば、面倒がおこることも多かった。相宿になった時の心得、用心はきわめて重要なことだった。

旅は相宿は有りがちなものなれども、手前をよく用心すれば、何事有るものにあらず。第一に戸締まりを心付け、また宵より相客の様子を窺ひ知るべし。もし酒乱、狂気等の人ある時は、早速その用意すべし。相宿にて異変有りしこと、その例すべからず。

「相宿にて異変」があつた例は少なくない。旅において、ある意味では最も無用心で、最も危険なことといつてよいかも知れない。「相宿となつたら、宵のうちから相客のことをよく観察せよ。もし少しでも不審のことがあれば、ただちに心の準備をし、体勢を整えておけ」というのである。

相宿では様々なことがおこる。相客が「酒宴」さかもりを始め、深夜まで呑み続ける。そんな時に絶対に寝てはいけない。もし自分に同行者がいるなら、かわりばんこ、交替で寝るべきだという。

相宿の場合、風呂の順番もめ事の一つ。相客の様子を覗い、先を譲るべきという。

旅は物事を扣^{ひか}へがちにすれば、身の益有ること多し。

と思われるからである。旅中に於ては万事忍耐すること、これが肝要なのだ。「道中第一の用心には、堪忍にまさる事なし」（東海道名所記）なのである。

道中ではいけないことも沢山ある。たとえば旅行中に体調をこわした時、

道中にて相客の中など、薬種、妙薬等の下直なるものをすすむるとも、堅く断わりて求むべからず。もし途中にて入用あらば、その所の薬種屋で調へべし。

相客などが薬を安く譲るからといっても、それを服用してはいけない。どうしても必要ならその地の薬屋で買えというのである。すすめられた薬に何が入っているか分からず、最悪の事態も考えられるからである。今も日本人旅行者が海外でこうした被害にあつた話は少なくない。

他にも旅行中、禁忌すべき項目は多い。無暗やたらに水を飲んで

はいけない。とくに溜まり水は危ない。「五苓散」^{ごれいさん}「山椒」「胡椒」の類を必ず携行するようにいう。

また旅先でよく知らない川を徒歩で渡つてはいけない。とくに「出水の河は、たとへ小川にても軽んじ、容易に渡るべからず」というのである。犠牲者も決して少なくない。

道中は色欲を別して慎むべし。売女は湿毒あり。

「湿毒」とは梅毒をさす。旅装にも注意がある。

道中差しの大小は軽く短きを差すべし。すべて長刀、長脇差、

または目立ちたる拵^{こしら}へ等、異風の衣類、道具用ゆべからず。

おとなしき体なれば難なし。

携帯する大刀、小刀、軽く短かいのが良い。長めのものや贅沢な作りのものは目立って良くない。服装、旅具も同じで、地味でおとなしいものが無難だというのである。ごく普通の格好で、普段着で行くのが一番危険が少ない。旅行だからといって精一杯お洒落をし、着飾って、高価なブランド品を持っていくなどというのはもつての外なのである。

夏は旅人疲れ果てて道路に休み、或ひは草むらに伏し、眠る人あれども、決してせぬ事なり。夏の野原には毒虫多し。

旅中にはさまざまな危険が潜んでいる。夏、疲れたからといって草叢で寝ころんで寝てしまう人もいるが、夏の野原には毒虫、毒草は数限りない。「なかんづく^{まむし}蝮、斑^{はんみょう}猫の大毒なることは、みな人の知るところなり」なのである。もしも毒虫にさされた時には「油薬、白龍香、梅花香」「桂花香」がよい。常時、「よき匂ひ袋を懐中」することだ。「乾^{かんきよう}姜と雄黄^{おおう}」「龍腦、麝香、樟腦」など香気の強いものが毒虫を避ける方策とすすめる。いずれもつい先頃まで防虫剤、防腐剤などに使われていたものである。

旅宿での蚤の襲来には相当閉口したのであろう。

苦参^{くじん}といふ草を生のままにて、寝る敷物の上へ入れ置けば、蚤よらぬなり。もつともこの草、野山に多くあるものなれば、道具がら心がけ、手折りて敷くべし。苦参の図、下にあり。見合すべし。

として図（図一）まで付載する。

毒虫、害虫ばかりではない。熊、狼などの危険も大きい。



図1 苦参の図 蚤退治に効くという

折は足もあらく踏むことならず、咳一ツも容易にせぬやうに、
慎み歩行くこと、その所の教へなるよし。

せきの小さな音一つでもなだれは発生する。実際の体験談から書き留められた、貴重な教訓なのである。

死ぬかも知れない。二度と故郷に戻って来れないかも知れない。江戸時代の旅は常に死と隣り合わせであったといっても過言ではなからう。事故死、病死、そんな災難がいつ降りかかってくるかも分からない。『旅行用心集』には万一旅先で死んだ時の用意も書かれている。「寺証文」を携行することを求めている。寺証文とは檀那寺が切支丹でないことを証明する文書であるが、いわば現在の身分証明書、旅券等の役割を果たしていた。もしも道中で客死した時は、寺証文によって留守家族にその知らせが届けられるからである。

深山、曠野の人里遠き所を往来する折は、竹杖の先を割り、道々叩き、音をして歩行すべし。また石突ある杖をつきてもよし。さすれば悪獣逃げ去るなり。

ともかく音をたてる。それが獣から身を守る方法だ。現代、熊よけにということ、鈴をぶら下げることと同じである。

冬期の旅で最も恐ろしいのは「なでつき」、すなわちなだれである。そのような危険個所を通る時は、

前後の寒暖を考へ、その土地の人に様子を尋ね通るべし。その

な修行であったのだ。その場所に行く、辿り着くこと自体が大変な修行であったのだ。

いとおしき子には旅をさせよ、といふ事あり。万事思ひ知るものは、旅にまざる事なし。鄙の永路^{ながち}を行き過ぐるには、物憂き事、嬉しき事、腹の立つ事、おもしろき事、哀れなる事、恐しき事、危なき事、をかしき事、とりどりさまざまなり。

「かわいい子には旅させよ」。『東海道名所記』の冒頭の言葉である。

五

最後に江戸時代の実際の旅日記をのぞいてみよう。武州多摩郡福生村（東京都福生市）に住む野島喜代松は安政四年（一八五七）年正月九日から二月二七日までの四八日間、東を上り、伊勢参りに向かう。外宮、内宮を参拝した後、一行は長谷を抜け、奈良の古寺を見て回る。さらに当麻、多武峯、吉野、高野山、堺、大坂、伏見と回り、京都に入り、名所を見物して帰途に着く。帰りは中山道を利用、善光寺にも立ち寄り、高崎を通って帰郷する。喜代松一行が歩いた総距離はおおよそ一五〇〇キロメートル。大旅行である。一日に約三、四〇キロメートル歩いたようだ。

伊勢詣りを記録した道中日記は数多いが、この安政四年の『道中日記帳』のおもしろいのは、途中、投宿した旅宿の名前はもちろん、

料金並びに宿の良し悪しが細かに記されていることである。たとえば湯本、箱根の宿では、

一 湯本 上、みの屋

三 貳百廿四文泊り

一 箱根 下々、橋屋

三 貳百廿八丁 百十六文中喰

湯本の旅籠は「上」ではあったが、箱根は「下々」であつたらしい。評価は「上々」「上」「中」「下」「下々」の五段階、まれに「上々吉」「上吉」なども見える。途中渡る橋代、船賃についても、「富士川 舟賃 廿四文」「ゆゑ（由比）川 橋代 十六文」のごとく記入されている。東海道随一の長さを誇った矢作橋については、

宿出口 柳橋（矢作橋） 長サ 貳百八間 東海道壱番之はし
也 此時此橋流 舟賃十三文

と記されており、当時、この矢作橋は残念ながら流されて、なかったらしい。一行は十三文払って舟で矢作川を渡ったようだ。

その土地、その土地の名物の記載も多い。鞠子では「此所 ところ汁名物」、鳴海では「鳴海しぼり 名物あり」、桑名では「焼蛤

名物あり、三輪では「此所　そふめん　名物也」と現代につながる名物、名産品の名前が連ねられている。

伊勢参詣を旨とした旅ではあったが、伊勢での記述は思いのほか簡略で、むしろ詳細に記録されているのは、京都や奈良などである。

九日

一、京都　ちくぜん屋

大津迄　三り　百三十式文泊り

藤森稲荷　三十三間堂　東福寺　七堂がらん　大仏参詣致シ

白川稲荷　きよ水くわおん　十六番也　并二おとハ乃瀧あり

ち音寺内廿八文出シ拝見　此所かのふほふげんふで　柳の

間　鶴の間　此板の間うごいすバリ　爰二日本一　つり鐘あり

高サ壱丈六尺　差渡シ九尺　ふち壱尺

重サ貳万三千貫目　是より西山　ひえい山参詣致し　あない

ちん壱組百文宛

二月九日、出立の日よりちようど一ヶ月、一行は京都に宿泊、旅籠は「ちくぜん屋」。「上」とあるから上宿であったのだろう。大坂より伏見を通り、京に入る。道順から京見物はまず藤森神社から始めたようだ。東福寺、三十三間堂、方広寺の大仏、清水寺、音羽

の滝、「ち音寺」、知恩院のことと思われるが、二十八文を出して堂内を見学、今でいえば拝観料である。狩野法眼筆の「柳の間、鶴の間」、有名なうぐいす張を歩き、日本一の釣鐘を見る。その大きさと重さにはよほど驚いたのであろう。高さ、直径、厚さ、重さが記しとどめられている。それから記載によれば西山、比叡山にまわったとある。比叡山での案内賃は一組で二百文、おそらく全員揃ったの参拝、拝観であったと思われる。一行は比叡山を琵琶湖側に下り、坂本に下り、その日は大津に宿泊した。

ものすごい健脚である。文中にある「西山」は存疑で、あるいは東山の誤りかとも思われるが、東福寺、三十三間堂、清水寺、知恩院など東山一帯の寺々を巡拝したあと、比叡山に登り、諸堂を見学、琵琶湖側に下りて、大津まで行く。これが一日の行程である。江戸期の旅行者が現代と較べていかに健脚で体力があったとしても、これだけの個所を一日で回ってしまうことにはやはり驚かされる。興味深いのは知恩院で払った二十八文、比叡山で支払った二百文である。もうこの時代、有名な寺社では拝観料、入場料を徴収していたことである。これは京都に限らず、箱根神社でも十文払って宝物を拝観しているし、久能山東照宮でも高野山でも同じだった。幕末のこの時代には金銭をとまなう観光業がすでに成立していたといつてよいだろう。

見学場所も三十三間堂、清水寺、音羽の滝、知恩院等々、現代の

京都見物と変わるところがないのも面白い。一行が奈良で見て回った場所も長谷寺、三輪大社、在原業平塚、春日大社、大仏、法華寺、西大寺、唐招提寺、薬師寺、法隆寺等々で、これとて現代の奈良見物とほとんど重なり合う。いやこれらの南都の諸大寺、諸大社は第一章で取り上げた、平安時代末期の女流歌人、殷富門院大輔たちが訪ね歩いた場所と同じなのである。在原業平ゆかりの遺跡を彼女らが経回したことは前に述べたが、およそ七百年後の旅人たちも、実に同じ所を見て回っていたのである。江戸時代中期ごろにはお伊勢詣りで伊勢を訪れた人はおよそ三〇〇万人にも達したといわれている。これだけの数の人が江戸時代、伊勢、あるいは京都、奈良へと押し寄せていたのである。総人口に占める割合からすれば、その数値は驚くほど高いものとなる。

遠い平安の昔から日本では旅は盛んであった。旅行大国、日本の姿は江戸時代ますます顕著となる。多数の道中記や絵図が次々と刊行され、『旅行用心集』ごときの旅の指南書まで発刊される。日本人は旅好きな国民であった。その傾向は現代にまではつきりと引き継がれている。十六世紀末、ルイス・フロイスが見た日本の姿はそのまま現代日本の姿でもある。

注 『十六夜日記』や『とはずがたり』の旅は女性の旅日記として広く知られているが、菅原孝標女の手になる『更級日記』の旅については言及さ

れることが、やや少ないように思われる。父孝標の上総介離任に際し、彼女は上総国府（今の千葉県市原市付近）より東海道を使って、京都までの帰京の旅に出立する。寛仁四年（一〇二〇）九月三日、作者十三歳の折のことであった。途次、彼女の囑目した風景は、

南は遙かに野の方、見やらる。東西は海近くて、いとおもしろし。（いまたち）

片つ方は海、浜のさまも、寄せ返る浪のけしきもいみじうおもしろし。

（にしとみ）

清見が関の浪も高くなりぬべし。おもしろきこと限りなし。（清見が関）

浪の寄せ返るも、色々の玉のやうに見え、まことに松の末より浪は越

ゆるやうに見えて、いみじくおもしろし。（浜名橋）

の如く、外海の光景は作者に新鮮な感動を繰り返し与えていたようだ。こ

とは海浜に限らない。例えば足柄山では、

足柄山といふは、四、五日、かねておそろしげに暗がりわたれり。や

うやう入り立つ麓のほどだに、空の気色、はかばかしくも見えず、え

もいはず茂りわたりて、いとおそろしげなり。（足柄山）

と書かれているところを見ると、不気味な足柄山の暗さにはさすがに恐怖感も覚えたようである。海浜の風景に「いとおもしろし」「いみじくおもしろし」と連発した彼女は、足柄山には「かねておそろしげ」「いとおそろし

げ」と繰り返しわざわざをえないほど、不安な気分であったのであろう。

しかし彼女が辿り着いた京中の三条の家の周囲は、

足柄山といひし山の麓に、暗がりわたりたりし木のやうに、茂れる所なれば、十月ばかりの紅葉、四方の山辺よりもけにいみじくおもしろく、錦を引けるやうなるに、

と叙述される。三条の家の秋の景色にも少なからず心動かされる。しかもその時、彼女が思い浮かべたのが、「おそろしげ」に思われた「足柄山」を懐しい想い出として引き合いに出してさえるのだった。『更級日記』の作者、菅原孝標女にとって、東国、関東の風景は強烈な印象として心に刻まれたようである。かつて見た東国の風景への憧れ、郷愁といったものは後年、西山に転居した折にもうかがえる。

東は野のはるばるとあるに、東の山際は比叡の山よりして、稻荷などいふ山まであらはに見えわたり、南は双の丘の松風、いと耳近う心細く聞こえて、内にはいただきのもとまで、田といふものの、引板ひき鳴らす音など、田舎の心地して、いとをかしきに、月の明かき夜などは、いとおもしろきをながめ明かし暮らすに、

と、西山の居宅からの眺望を情感をこめて記述する。孝標女は都市的な景観より、田園的な景観を好尚していたことがよくわかる。そもそも彼女は都会の風景より、地方の風景を好んでいた。旅に出たいという止むに止まれぬ気持は終生抱いていたようで、後年のことになるが、石山寺を訪れたかと思うと、鞍馬に参詣し、長谷には二度も出かけている。それにとどまらず、和泉には船で向かい、途中、住吉の浦の好景に接し、

空も一つに霧りわたれる。松の梢も、海の面も、浪の寄せ来る渚のほ

ども、絵にかきても及ぶべき方もなう、おもしろし。

と、賞嘆してやまない。海浜の光景は生涯、彼女の心をとらえ続けていたようだ。『更級日記』の時代は平安後期。王朝女流日記の一つと数えられるが、その内実には「王朝」をはみだすような、風景への傾斜と旅への欲求が読みとれ、女の旅を考える上で、重要な作品の一つであるといえることができる。

参考文献

殷富門院大輔集全釈（私家集全釈叢書13、森本元子、平成五年）

熊野詣日記（図書寮叢刊、諸寺縁起集、宮内庁書陵部、一九七〇年）

恋田知子「女性の巡礼と縁起・靈験説話——『熊野詣日記』をめぐって——」（『巡礼記研究』第一集、二〇〇四年十二月）

東海道分間絵図（道中記集成 第九卷、今井金吾監修、平成八年）

八隅蘆庵著、旅行用心集（生活の古典双書3、今井金吾解説、昭和四七年）

安政四年道中日記帳（福生市郷土資料室年報IV、福生市教育委員会、昭和五九年）

補記 なお、本稿は成蹊大学『アジア太平洋研究』三三三号（二〇〇八年十一月）に掲載したものに加筆補訂を加えたものです。